

厚生 の 指 標, 50, 7-13 (2003)

## Age-Period-Cohort モデルによる日本人中高年の損失寿命に関する分析

小田切陽一、内田博之

【目的】日本人中高年(40~64歳)の早期死亡による損失寿命の過去35年間の推移に対する年齢、時代およびコホート(同年代出生コホート)の影響について明らかにすることを目的とした。

【方法】1960年から1994年までの全死因と主要死因(悪性新生物、心疾患、脳血管疾患、不慮の事故、自殺)の5年齢階級(40~44歳から60~64歳)のYPLL率を5年ごとの7期間について男女別に算出し、コホート表を作成した。それぞれのコホート表についてベイズ型Age-Period-Cohort分析を適用することにより、3要因(年齢、時代、コホート)の効果を分離して推定し、各要因の損失寿命に与える影響について考察した。

【結果】全死因の損失寿命に対し、男性では後年生まれのコホートほど効果が減少する出生年代の影響が顕著であった。さらに50~54歳を最大とし、60~64歳で大きく低下する年齢の影響も認められた。これとは対照的に、女性では年齢やコホートの影響は小さく、むしろ時代進行に伴って一貫した減少を示した時代の影響が大きかった。死因別の分析結果では、脳血管疾患の損失寿命に対しては、男女ともに時代の影響が顕著であり、加えて、男性では1916~1925年生まれを底としたV字状のコホートの影響が認められ、このコホート効果は同じ循環器疾患である心疾患の場合と類似していた。悪性新生物では、男性において50歳代における年齢影響が大きく、また、1921-1930年生まれ以降の効果減少を特徴としたコホートの影響を認めたが、女性では、3要因の影響は明瞭でなかった。不慮の事故についても、男性でのみ、年齢と時代の影響が強く認められたほか、1926~1935年生まれをピークとしたコホートの影響も認められた。自殺では、男女に共通して、年齢効果が相対的に大きく、若齢側の影響が大きかった。加えて、男性では1980~84年をピークとした時代の影響、さらには1916~1925年生まれから1936~1945年生まれにかけての効果の増大を特徴としたコホートの影響が認められた。

【結論】ベイズ型コホート分析によって、日本人中高年の早期死亡による損失寿命の推移に対する年齢、時代および同年代出生コホートの影響が明らかにされた。とくに男性の場合、全死因の損失寿命に対してだけでなく、主要死因別の損失寿命に対しても同年代出生コホートの影響が明らかになった。一方、女性ではコホートの影響は小さく、むしろ全死因と脳血管疾患死亡の損失寿命に対する時代の影響が特徴として把握された。